



Japan Foundation for
Regional Art-Activities

地域創造レター

9月号—No.269

2017.8.25

(毎月1回25日発行)

News Letter to Arts Crew

【鴨の羽色(かものはいろ)】鴨の羽のような青緑色。

雌雄で姿が異なることを性的二型という。鳥類には雌が地味で雄が派手なものが多いが、鴨の羽色は青首と呼ばれる派手な青緑色をした雄の頭からとった色名。英語では青みがかったものをティール・ブルー、緑みがかったものをティール・グリーンと呼ぶ(ティールはコガモ、マガモのこと)。

●目次 / contents

今月のニュース	2
地域創造フェスティバル2017報告	
今月の情報	4
地域通信 / 特集 アートプロジェクト / アーツセンター情報	
制作基礎知識シリーズ Vol.41	10
公立文化施設の多言語対応	
今月のレポート	12
青森県三沢市 三沢市寺山修司記念館20周年記念特別公演 「幻想市街劇『田園に死す』三沢篇」	

66組のアーティストプレゼンや高齢社会シンポなど充実

地域創造フェスティバル2017 報告

2017年8月1日～3日



今年で10回目となる地域創造フェスティバルは、地域創造の事業紹介とともに、公立ホールを運営する上で参考となる情報提供を行うこと、ネットワークをつくる場を提供することを目的としています。なかでも特徴となっているのが、おんかつ支援登録アーティストとダン活登録アーティストの実演によるプレゼンテーションで、今年は計66組がその実力を披露しました。

そのほか、調査研究成果を踏まえたシンポジウム、近年の公立ホールを取り巻く動向を紹介するセミナー、音楽アウトリーチや現代ダンスに取り組みたい会館向けの各種セミナーが行われ、連日、アーティストや関係者との情報交換会も催されるなど、地域創造のネットワークを総動員したプログラムとなりました。

また、今回は、地域創造理事でもあるピアニストの仲道郁代さんが芸術監督となって立ち上げたフォーラム事業「音楽がヒラク未来」^(*)とタイアップしたシンポジウムが行われるなど、新たな試みもありました。開催にご協力いただきました関係者の皆様、全国から来場してくださいました公立ホールの皆様には、心よりお礼申し上げます。

●テーマは“高齢社会”

共通シンポジウムでは、地域創造が平成28年度に実施した「高齢社会における公立文化施設の取り組みに関する調査研究」(左欄参照)がテーマになりました。まず、調査を担当した大澤寅雄さん(ニッセイ基礎研究所)が公立文化施設に行ったアンケート結果や有識者による座談会での意見を報告。高齢者事業の目的は、文化・生涯学習・余暇活動が主であり、社会的

孤立の防止や介護予防を掲げるところは限られているといった傾向などが紹介されました。

それを受けて、パネリストによる事例紹介とディスカッションが行われました。そのひとりが熊本県立劇場で高齢者事業を展開してきた嶺浩子さんです。同劇場では、演劇のアウトリーチ事業をきっかけに、地元の関係機関と連携して地域の課題解決を行う「地域をむすぶアートプロジェクト」を立ち上げ、2014年から高齢者向け事業をスタート。熊本保健科学大学などと連携し、介護系学生や作業療法士向けの研修会、ワークショップを行うとともに、特別養護老人ホームなどでのアウトリーチを行ってきました。

また、おんかつ登録アーティストとして数多くの高齢者施設でのアウトリーチを行ってきたピアニストの白石光隆さん、長年にわたってアーティストを派遣する高齢者アート・デリバリー事業を行ってきたNPO法人芸術資源開発機構(ARDA)の三ツ木紀英さん、地域に開かれた多世代交流拠点「世田谷中町プロジェクト」を立ち上げた東京都市大学准教授の坂倉杏介さんがそれぞれの取り組みを紹介。「大学と連携して演劇ワークショップの手法を使って介護職員の育成をしていけるような仕組みづくりが必要」「アート・デリバリーによっていきいきしたお年寄りに触れ、介護職員が癒される」「(高齢者だけではなく)すべての世代が自分のもっているものを他の人のために使うというサービスデザインの観点でコミュニティが提供してきたメニューを見直すべき」「文化施設はいろいろな人が集まっていろいろなことを考えられるオープン・イノベーションができる場になる可能性がある」など、さまざまな観点からの意見交換が行われました。

写真

左：共通シンポジウム「高齢社会における公立文化施設の取り組みについて」

右：おんかつ支援登録アーティストの様子。白石光隆さん(ピアノ)と小川正毅さん(ホルン)のプレゼンでは、漏斗を使ったビニール管ホルンで金管楽器の難しさを体験

*「音楽がヒラク未来」

主催館とともに企画を行い、音楽が社会に果たす役割について考えるセミナーやディスカッション、具体的なトライアルを行う2日間のプログラム。地域創造助成事業。

●平成28年度「高齢社会における公立文化施設の取り組みに関する調査研究」報告書のご案内

この調査研究は、高齢者を意識した多様な事業を展開している公立文化施設を対象に具体的な取り組み事例などを調査し、高齢社会に向けて全国の地方公共団体や公立文化施設の今後の文化・芸術面での事業計画の参考となる情報資料などを提示することを目的として企画されたものです。

高齢者福祉や公立文化施設等に関する専門家座談会や公立文化施設へのアンケート調査の実施、そして全国5カ所の関係施設等での現地調査を行い、その結果を整理して報告書にとりまとめました。報告書は当財団ウェブサイトからも閲覧・ダウンロードが可能です。

<http://www.jafra.or.jp/j/library/investigation/new/index.php>

▼ 今月のニュース

地域創造からのニュースを毎月掲載します

●事例から学ぶ「ダン活のススメ」

来年度のダン活に参加する会館を対象にした全体研修会の一環として、ダンス事業の可能性を知っていただくための事例紹介セミナーが公開で行われました。今回は、平成27年度の実績変更により応募が可能となった都道府県・政令市として初めて県立ホールでの実施となった島根県民会館と、八尾市文化会館プリズムホールの取り組みが紹介されました。

県立施設として県域でダンスのアウトリーチや神楽とのコラボレーションなどの館外活動を行ったことのある島根県民会館では、障害者差別解消法が整備されたことに伴い、今回はじめて視覚障害者向けのワークショップを企画しました。

担当の福岡一さんは、「障害のある人に県民会館を利用する場所として感じてもらえるためにどうすればいいかと考えていました。できるかどうかわからなかったので、まず、下見の時にアーティストの田畑真希さんに会ってもらい、体験してもらった上で実施を決めましたが、お互いのことを知りあうとても貴重な機会でした。参加者からは、『盲導犬歩行の汗とダンスの汗は違う。心の緊張がとれた汗だった』など、素晴らしい感想をいただきました」と振り返っていました。

また、舞踏家の田村一行さんと事業を行ったプリズムホールでは、「180分間舞踏入門」というワークショップを行い、参加者15人(うち60歳以上の女性11人)が公演に出演。八尾らしい作品として河内音頭なども取り入れたパフォーマンスを行いました。今年度実施館からダン活の要綱が改変され、アウトリーチとワークショップを行うAプログラム、市民参加作品の創作を行うBプログラム、作品の公演を行うCプログラムから選択できるようになったので、こうした市民参加事例も参考になったのではないのでしょうか。

●アーティストの多彩なプレゼンテーション

ダン活プレゼンテーションには、初めての登録となる中村蓉さんと長井江里奈さんが登場。誰かの思いの込められた場所で踊り、映像作品

をつくるプロジェクトを行っている中村さんは、トイレを必死で我慢するときのように全身全霊で何かになり切ってみるといいうワークショップで会場を沸かせていました。また、ダンサー・音楽家・造形作家などが参加する「山猫団」を率いる長井さんもマイムや音楽を使った遊び心のあるパフォーマンスを披露しました。

また、おんかつでは経験豊かなベテランがそれぞれの持ち味を生かしたプレゼンテーションを展開。楽器の音色に耳を澄ませてもらうため暗闇の中で演奏したり、伴奏者とのコラボレーションや大曲への挑戦や新しいアウトリーチプログラムにより音楽家としての成長をアピールし、また、学校で演奏している定番曲やワークショップの再現でアウトリーチへの思いを語るなど、それぞれに工夫したパフォーマンスが続きました。



上: 音楽がヒラク未来 in 地域創造フェスティバル
下: ダン活プレゼンテーション。中村蓉さんによるワークショップのデモンストレーション

地域創造フェスティバル2017 プログラム

1日目(8月1日)
●共通シンポジウム「高齢社会における公立文化施設の取り組みについて」 [調査報告]大澤真雄 [モデレーター]吉本光宏 [パネリスト]嶺浩子、白石光隆、三ツ木紀英、坂倉杏介
●ダン活プレゼンテーション セレノグラフィカ、北尾亘、中村蓉、田村一行、長井江里奈、鈴木ユキオ、東野祥子、田畑真希
●音楽アウトリーチセミナー 入門・発展コース共通ワークショップ [講師]北村成美
●都道府県・政令市課長会議
●おんかつ支援プレゼンテーション 白石光隆/中川賢一/佐々木京子/新居由佳梨(ピアノ)、北島佳奈(ヴァイオリン)、長谷部一郎/奥田なな子(チェロ)、岩間文正/岩佐和弘/森岡有裕子(フルート)、藤田旬(ファゴット)、小川正毅(ホルン)、加藤直明(トロンボーン)、渡邊史(ソプラノ)、村上敏明(テノール)、吉川健一(バリトン)、浜まゆみ/大熊理津子(マリンバ)、前田啓太(打楽器)、松尾俊介(クラシック・ギター)、Dual KOTO×KOTO(箏デュオ)、Quartet SPIRITUS/Quatuor B(サクソフォン四重奏)
2日目(8月2日)
●音楽アウトリーチセミナー 入門コース基礎ゼミ「アウトリーチとは」[おんかつでの事例紹介]/発展コース応用ゼミ「自己紹介と発展基礎」[事例紹介と広報計画] [講師]小澤櫻作、丹羽徹、花田和加子、山本若子、三浦幸恵
●ダン活セミナー「ダン活のススメ」 [講師(ダン活実施団体)]井上恵理子(八尾市文化会館プリズムホール)、福岡一(島根県民会館) [ダン活コーディネーター]佐東範一、志賀玲子、平岡久美
●公共ホールを取り巻く近年の動向—芸術創出の「場」を考える— [講師]草加叔也
●おんかつ支援プレゼンテーション 久保田葉子/今野尚美/新崎誠実/泊真美子/岩崎洵奈(ピアノ)、磯絵里子/早稲田桜子/瀧村依里/松本蘭(ヴァイオリン)、加藤文枝(チェロ)、吉岡次郎(フルート)、大石将紀(サクソフォン)、高見信行(トランペット)、喜名雅(チューバ)、大森智子/乗松恵美/廣田美穂(ソプラノ)、菅家奈津子(メゾソプラノ)、黒田晋也(テノール)、ヴィタリ・ユシュマノフ(バリトン)、野尻小矢佳(パーカッション&ボイス)、塚越慎子(マリンバ)、福島青衣子(ハーブ)、デュエットウ かなえ&ゆかり/ピアノデュオ ドウオール(ピアノデュオ)、Buzz Five(金管五重奏)、BLACK BOTTOM BRASS BAND(ブラスバンド)
3日目(8月3日)
●音楽アウトリーチセミナー 入門・発展コース共通ゼミ「事業計画」/発展コース応用ゼミ「グループディスカッション」 [講師]小澤櫻作、丹羽徹、花田和加子、山本若子
●地域創造助成要綱説明会/リージョナルシアター事業説明会
●おんかつ支援プレゼンテーション 高橋和歌(ヴァイオリン)、海野幹雄(チェロ)、田村真寛(サクソフォン)、益田正洋(クラシック・ギター)、江崎浩司(リコーダー)、片岡リサ(箏)、Duo Yamaguchi(ピアノ&チェロ)、Quintet H(木管五重奏)
●音楽がヒラク未来 in 地域創造フェスティバル [パネリスト]仲道都代、吉本光宏、津村卓、小澤櫻作

地域通信

●データの見方

情報は地域ブロック別に、開催地の北から順に掲載してあります。●で表示してあるのは開催地です。📍マークが付いている事業は地域創造の助成事業です。ラインの下は、事業運営主体、住所、電話番号、担当者名の順に記載してあります。色帯部分が事業名で、以下、内容を紹介しています。

●地域ブロック

[北海道・東北]北海道、青森、岩手、宮城、秋田、山形、福島
[関東]茨城、栃木、群馬、埼玉、千葉、東京、神奈川
[北陸・中部]新潟、富山、石川、福井、山梨、長野、岐阜、静岡、愛知
[近畿]三重、滋賀、京都、大阪、兵庫、奈良、和歌山
[中国・四国]鳥取、島根、岡山、広島、山口、徳島、香川、愛媛、高知
[九州・沖縄]福岡、佐賀、長崎、熊本、大分、宮崎、鹿児島、沖縄

●情報提供先

ファックス、電話、e-mailでお願います。
Fax. 03-5573-4060 Tel. 03-5573-4066
letter@jafra.or.jp
地域創造情報担当 宇野・高澤

●2017年11月号情報締切
10月2日(月)

●2017年11月号掲載対象情報
2017年11月～18年1月に開催もしくは募集されるもの

地域創造ウェブサイト「人材ネットバンク」 掲載情報募集中

当財団ウェブサイト内に以下の情報を掲載するページを設けています。

- ◎公共ホール等の求人情報
 - ◎公共ホール等で実施する人材育成研修の開催情報
- 掲載・申込方法など詳細はウェブサイトをご覧ください。
<http://www.jafra.or.jp/>

北海道・東北

●札幌市

本郷新記念札幌彫刻美術館(札幌市芸術文化財団)
〒064-0954 札幌市中央区宮の森4条12丁目
Tel. 011-642-5709 垣内陽子
<http://www.hongoshin-smos.jp/>

New Eyes 2017 家族の肖像

札幌で活躍する新進・中堅作家を紹介する「New Eyes」シリーズ。3回目となる今回は“家族”をテーマに、7名の作家による立体・写真・映像・インスタレーションなどの作品を紹介する。血縁が紡ぐ時間、新たな生命の誕生といった視点に加え、近すぎる存在ゆえの摩擦など、“愛”だけに回収されない多様な家族観を通して、共に生きることの意味を問う。

[日程] 7月22日～10月1日
[会場] 本郷新記念札幌彫刻美術館



展示の様子(鈴木涼子「Mama Doll」シリーズ 2004年)

●仙台市

仙台市市民文化事業団
〒981-0904 仙台市青葉区旭ヶ丘3-27-5
Tel. 022-727-1872 石濱あゆみ
<http://sencla.com/>

仙台クラシックフェスティバル 2017

「せんくら」の愛称で親しまれる、今年で12回目となるクラシック音楽祭。仙台市内の4施設10会場で、それぞれ朝から晩までオーケストラや室内楽などさまざまなコンサートが行われ、地下鉄の仙台駅と旭ヶ丘

駅でも「地下鉄コンサート」が行われる。会場間を移動しながら公演の“はしご”ができ、ライフスタイルに合わせて全87のコンサートを選ぶ楽しさも魅力となっている。
[日程] 9月29日～10月1日
[会場] 仙台市内各ホール、地下鉄仙台駅、旭ヶ丘駅



昨年のフィナーレ公演(2016年10月2日/イズミティ21・大ホール)

関東

●茨城県水戸市

水戸市芸術振興財団
〒310-0063 水戸市五軒町1-6-8
Tel. 029-227-8118 篠田・関根
<http://arttowermito.or.jp/>

茨城の名手・名歌手たち 第27回 オーディション合格者による演奏会

茨城県ゆかりの優れた音楽家を広く紹介し、さらなる活躍を奨励するとともに、茨城県の音楽文化の振興・発展を願い、開館以来毎年行っている企画。今年で27回目となり、過去の合格者は延べ300組を超える。今年オーディション合格者10名が集結し、コンサートを開催する。
[日程] 9月16日
[会場] 水戸芸術館

●さいたま市

埼玉県芸術文化振興財団
〒338-8506 さいたま市中央区上峰3-15-1
Tel. 048-858-5505 請川幸子
<http://www.saf.or.jp/>

《世界ゴールド祭》キックオフ!

世界各国の高齢者によるアート活動の交流と知見の交換・発展

を目指す「世界ゴールド祭」開催への足がかりとして企画された交流プログラム。平均年齢78歳の演劇集団「さいたまゴールドシアター」の新作公演『薄い桃色のかたまり』(9月21日～10月1日)と同時に開催するもので、「高齢社会における芸術文化の可能性—劇場は地域に何をもたらすことができるのか—」をテーマに、英国サドラーズ・ウェルズ劇場など海外の先進的な取り組みを紹介するシンポジウムやダンスワークショップなどが行われる。

[日程] 9月21日～24日
[会場] 彩の国さいたま芸術劇場



サドラーズ・ウェルズ劇場「カンパニー・オブ・エルダース」 ©Jane Hobson

●千葉県船橋市

船橋市民文化ホール
〒273-0005 船橋市本町2-2-5
Tel. 047-434-5555 足立篤史
<http://www.city.funabashi.lg.jp/shisetsu/bunka/0001/0001/0001/p011077.html>

市制施行80周年記念事業「アンデルセンプロジェクト2017 “アンデルセン・光と影の物語”～最終章 そして新たな旅立ちへ～

2015年から3カ年計画で始まった市民参加による舞台「アンデルセンプロジェクト」の集大成となるミュージカル。公募によって集まった小学生から70歳代までの幅広い世代の市民が出演し、『アンデルセン自伝—わが生涯の物語』などの作品を題材に、アンデルセンの生涯を描いた舞台を上演する。

[日程] 9月16日、17日
[会場] 船橋市民文化ホール

▼ 今月の情報

アーツセンター、アーツクルーから寄せられた情報を毎月掲載します

●千葉県市原市

市原湖畔美術館

〒290-0554 市原市不入75-1
Tel. 0436-98-1525 渡辺文菜
<http://lsm-ichihara.jp/>

ラップ・ミュージアム RAP MUSEUM

近年、若者を中心に流行するラップ(ヒップホップ)に着目し、派生した文化的実践にも焦点を当てる新しい試みの展覧会。第一線で活躍するラッパーのリリック帳や、日本のラップに関するチラシ、音源、雑誌等の資料のほか、ラップのリズムを可視化した新作映像作品を展示。MCバトルやラップを通して地域を描いた映画『サウダーズ』の上映なども行われる。

[日程] 8月11日～9月24日

[会場] 市原湖畔美術館

●東京都目黒区

目黒区芸術文化振興財団

〒152-0023 目黒区八雲1-1-1
Tel. 03-5701-2913 井上陽代
<http://www.persimmon.or.jp/>

めぐろで第九2017

開館以来開催され、多くの人に親しまれてきた第九の演奏会。今年、若き指揮者アンドレア・パティストーニ率いる東京フィルハーモニー交響楽団と、オペラなどで活躍しているソリストが集結し、公募により結成された合唱団と共に、“歓喜の歌”でホール開館15周年の節目を飾る。

[日程] 9月24日

[会場] めぐろパーシモンホール

●東京都豊島区

池袋演劇祭実行委員会

〒170-0013 豊島区東池袋4-5-2 ライズアリーナビル3F(あうるすぽっと内)

Tel. 03-3985-0960 稲村宗子

<http://www.ikebukoengekisai.jp/>

池袋演劇祭

今年で29回目を迎える地域密着型の演劇祭。豊島区および近隣で活動している劇団の公演が16会場で行われ、100人の公募審査員の採点により参加作品を表彰する。昨年の入賞団体・特別参加団体を含め55団体が参加。今年さらなる飛躍を目指し、区が掲げる「国際アート・カルチャー都市構想」の下、「まち全体が舞台の誰もが主役になれる劇場都市」を目指して、舞台芸術関連団体に幅広く連携を呼びかける。

[日程] 9月1日～30日

[会場] あうるすぽっと、シアターグリーン、東京芸術劇場 ほか

●東京都北区

北とびあ演劇祭実行委員会

〒114-8503 北区王子1-11-1
(北区文化振興財団内)

Tel. 03-5390-1221 鈴木愛子

<http://www.hokutopiaengekisai.com/>

北とびあ演劇祭2017

区民が「みる」「でる」「つくる」をキャッチフレーズに、2000年に始まった演劇祭。回数を重ねるごとに参加劇団数が増え、今年高校演劇部をはじめとした、29もの多彩な劇団が参加する。企画・運営は有志で集まった区民ボランティアから成る実行委員会が担う。大衆演劇ワークショップや舞台照明講座など関連プログラムも実施される。

[日程] 9月16日～10月15日

[会場] 北とびあ

●東京都町田市

町田市立国際版画美術館

〒194-0013 町田市原町田4-28-1

Tel. 042-726-0860 町村悠香

<http://hanga-museum.jp/>

インプリントまちだ展2017

絵描き・ながさわたかひろ、サッカー・FC町田ゼルビアでブレイク刷ルー!

東京オリンピック・パラリンピックに向けて4年にわたり開催予定の、若手版画家を招聘し、町田に取材した新作を発表する展覧会シリーズの第1弾。「絵は声援になる、応援は力になる」ことを信じ、プロ野球の試合を絵と版画で描いてきたアーティスト・ながさわたかひろが、JリーグのFC町田ゼルビアを取材し、新作を制作する。

[日程] 7月29日～9月24日

[会場] 町田市立国際版画美術館



ながさわたかひろ《FC町田ゼルビアを描く! vs ロアッソ熊本: J2 第11節》(2017年、ペン・色鉛筆)

●横浜市

横浜能楽堂

〒220-0044 横浜市西区紅葉ヶ丘27-2

Tel. 045-263-3055 秦野五花

<http://www.ynt.yaf.or.jp>

横浜能楽堂+ジャパン・ソサエティ(NY)共同制作作品 「SAYUSA—左右左(さゆうざ)」

横浜能楽堂とNYのジャパン・ソサエティが2012年から共同で進めてきたプロジェクト。能の手法を取り入れた新作ダンスを世界初演する。日本研究の第一人者ドナルド・キーンの前案指導の下、イタリア人演出家・振付家ルカ・ヴェジェッティが原案・演出・振付を担当し、能楽小鼓方の大倉源次郎が音楽監督を務め、笠井叡、中村恵恩、鈴木ユキオらが踊る。能舞台の新たな可能性と魅力に迫る。

[日程] 9月2日

[会場] 横浜能楽堂

北陸・中部

●新潟市

NIDF2017実行委員会

〒951-8131 新潟市中央区白山浦1-613-69

Tel. 025-234-4530 福島尚子

<https://artscouncil-niigata.jp/nidf/>

新潟インターナショナルダンスフェスティバル2017

「東アジア文化都市2015」の一環として初めて開催され、今年2度目となる、りゅーとびあ専属舞踊団Noism芸術監督の金森積がアーティストック・ディレクターを務める舞台芸術祭。大邱市立舞踊団(韓国)、T.H.Eダンスカンパニー(シンガポール)、城市当代舞踊団(香港)が出演し、作品上演のほか、3カンパニーの芸術監督による舞踊家対象のワークショップ、国際交流シンポジウムが行われる。

[日程] 9月26日～12月17日

[会場] りゅーとびあ新潟市民芸術文化会館



城市当代舞踊団「Amidst the Wind」
photo: Conrad Dy-Liacco

●富山県高岡市

高岡市民文化振興事業団

〒933-0044 高岡市古城1-3
Tel. 0766-20-1560 小久保奈緒子

<http://www.shimin-kaikan.com/>

2017高岡市民会館文化ストック⇒クラウド事業

「天才たちと何できる?」

世界的に活躍する表現者と市民を繋ぎ、今後の展開へと広がっていくためのきっかけづくりを目的に行う「文化ストック⇒クラウド事業」の第2弾。今回は、舞踊家の森山開次を講師に迎え、作品が出来るまでのプロセスを語

るとともに、ダンス経験者を対象とした公開ワークショップを行い、身体表現における“創造の場”を体験する。

[日程] 9月16日

[会場] 高岡市民会館



6月の「天才たちと何ができる?」(指揮者・金聖響による吹奏楽クリニック)

●富山県高岡市

高岡クラフト市場街実行委員会
〒933-8567 高岡市丸の内1-40
(高岡商工会議所内)

Tel. 0766-23-5000

<http://ichibamachi.jp/>

高岡クラフト市場街2017

全国と地元の作家によるクラフト作品の展示・販売、工場見学(高岡クラフトツーリズム)や、ものづくりワークショップ、食とクラフトのコラボなど、さまざまな切り口で高岡のものづくりを楽しむことができるイベント。気に入った作品を購入することもできる「芸芸都市高岡2017クラフト展」なども同時開催される。

[日程] 9月22日~24日

[会場] 高岡市街地一帯

●石川県輪島市

石川県輪島漆芸美術館

〒928-0063 輪島市水守町四十筋11

Tel. 0768-22-9788 寺尾藍子

<http://www.city.wajima.ishikawa.jp/art/>

没後50年記念 竹園自耕

—蒔絵と図案—

輪島で初めて帝展で入選を果たした漆芸家・竹園自耕の展覧会。戦時中は業界保持に専念し、戦後は徐々に一品制作よりもむしろ椀の加飾など実用品製

作に立ち戻り、地元の産業を支えた。本展では互いが切磋琢磨しあうことで産地の繁栄を目指した当時の輪島の姿を振り返り、漆芸家としての歩みを図案や作品とともにたどる。

[日程] 9月9日~11月6日

[会場] 石川県輪島漆芸美術館

●福井県越前市

武生国際音楽祭推進会議

〒915-0832 越前市高瀬2-3-3

(越前市文化センター内)

Tel. 0778-23-5057 森由華

<http://takefu-imf.com/>

武生国際音楽祭2017

1990年から開催している音楽祭。有志ボランティアによる音楽祭推進会議により企画・運営され、「まちづくり」「ひとづくり」「みらいづくり」をコンセプトに創造性豊かな音楽祭として継続して開催されている。現代曲から伝統音楽、クラシックと幅広い音楽が堪能でき、多くの新作にもふれることができると同時に、若手音楽家のための作曲ワークショップやアカデミーが開催される。

[日程] 9月10日~17日

[会場] 越前市文化センターほか

●長野県長野市

長野県信濃美術館

〒380-0801 長野市箱清水1-4-4(善光寺東隣)

Tel. 026-232-0052 松浦千栄子

<http://www.npsam.com/>

長野県信濃美術館クローゼン

展「信濃美術館クローゼン

展「ネオヴィジョン新たな広がり」

全面改築のため10月で休館となる信濃美術館のクローゼン展。建て替えとってしまう美術館の建築(設計:林昌二)に着目した第一部、一般投票による「この1点」を来館者から寄せられたコメントとともに展示する第二部のほか、第三部では、こ

れからを担う信州ゆかりの若手作家を、パフォーマンスやワークショップ、公開制作などさまざまな形で紹介する。

[日程] 9月16日~30日

[会場] 長野県信濃美術館

●長野県松本市

まつもと演劇祭実行委員会事務局

〒390-0874 松本市大手4-7-2

Tel. 0263-32-0088 永高和美

<https://matsumotoengekikai.jimdo.com/>

第22回まつもと演劇祭

「同時多発・週末に演劇三昧」をコンセプトに、今年で22回目を数える演劇祭。全国の地域劇団に参加を呼びかけ、5会場で10劇団による38公演が行われる。会場も演劇専用ホールのみならず、米蔵や神社の斎館など多彩な施設を活用しており、歩いて回れる距離にすべての会場を配置している。

[日程] 9月23日、24日

[会場] まつもと市民芸術館、ピカデリーホール、池上邸蔵ほか

●岐阜県多治見市

多治見市笠原中央公民館

〒507-0901 多治見市笠原町2081-1

Tel. 0572-43-5155 柴田陵一

http://www.tajimi-bunka.or.jp/kasa_pub/

GONNA×ISAMI和太鼓コンサート

名古屋市で結成され、和太鼓とマリンバの編成で、海外でも活躍するGONNA(ガナ)と、公民館講座として長年開催されたこども和太鼓教室から発展し、GONNAメンバーの木村勇介が指導する「かさはら和太鼓クラブISAMI」によるジョイントコンサート。ISAMIには子どもから大人まで約20人が在籍し、地域行事などで日頃の練習成果を披露している。

[日程] 9月17日

[会場] 多治見市笠原中央公民館

●愛知県豊田市

豊田市美術館

〒471-0034 豊田市小坂本町8-5-1

Tel. 0565-34-6610 鈴木・能勢・西崎
<http://www.museum.toyota.aichi.jp/>

奈良美智 for better or worse

画家・奈良美智の大規模個展。学生時代を過ごした場所にほど近い美術館で開催する、作家によれば30年越しの「卒業制作」。初期作品から最新作まで、国内未発表作品も含めた作家の多様な表現を、絵画を中心に展示する。感性をはぐくんできたレコード、画集、小説など、作家の背景も含めて紹介し、その歩みをたどる。

[日程] 7月15日~9月24日

[会場] 豊田市美術館

●愛知県長久手市

長久手市文化の家

〒480-1166 長久手市野田農201

Tel. 0561-61-3411 市野華奈子

http://www.city.nagakute.lg.jp/bunka/ct_bunka_ie.html

劇王XI~アジア大会~

長久手市発祥であり、全国各地に広がった短編演劇連続上演イベントの元祖「劇王」が4年ぶりに復活し、劇作家が競う。今回はアジア大会として、予選を勝ち抜いた日本各地域の代表に加え、韓国、香港、シンガポールからも参戦。観客とゲスト審査員(安住恭子、天野天街、鴻上尚史、坂手洋二、西田シャトナー)による投票で優勝者を決定する。

[日程] 9月15日~17日

[会場] 長久手市文化の家

近畿

●大阪市

大阪クラシック実行委員会

〒553-0005 大阪市福島区野

▼ 今月の情報

アーツセンター、アーツクルーから寄せられた情報を毎月掲載します

田1-1-86

Tel. 06-6469-5176 宮上真弓

<http://www.osaka-classic.com/>

大阪クラシック

2006年から毎年開催しているクラシック音楽の祭典。大阪フィルハーモニー交響楽団など大阪で活動している5つの楽団が出演。メインストリートである御堂筋と中之島エリアを中心に、通勤・通学帰りに立ち寄れるよう会場エリアを拡大し、気軽に音楽を楽しむことができるよう34会場で81公演を開催する。

[日程] 9月10日～16日

[会場] 大阪市中央公会堂、フェスティバルホール、大阪市役所ほか



昨年のコンサート(阪急うめだ本店)
(撮影:飯島隆)

●大阪府河内長野市

河内長野市文化振興財団

〒586-0016 河内長野市西代町12-46

Tel. 0721-56-6100 山田倫香

<http://lovelyhall.com/>

かわちながの世界民族音楽祭 2017 奥河内音絵巻「山を鳴らす ～木と奏でる人々の歌」

地域の資源である「おおさか河内材」で制作した奥河内三弦、オカンナ笛などさまざまなオリジナル楽器を用い、奥河内ならではの音楽を世界に向けて発



アーティストと市民総勢約150名で舞台を創りあげる

信していこうという音楽祭。かんなくずで衣裳や舞台を彩るなど「木」をテーマにした創作舞台で、踊りや歌とともにさまざまな“奥河内の音”が奏でられる。

[日程] 9月10日

[会場] ラプリーホール(河内長野市立文化会館)

●兵庫県伊丹市

いたみ文化・スポーツ財団

〒664-0846 伊丹市伊丹2-4-1

Tel. 072-782-2000 香井亜希子

<http://www.aihall.com/>

「地域とつくる舞台」シリーズ アイホールがつくる「伊丹の物語」プロジェクト「さよなら家族」

3年という年月をかけて、劇作家ごまのはえが伊丹の歴史と記憶を紐解いて創作した作品を上演。1、2年目に公募した昔の伊丹の写真を題材として地域住民を取材し、新しい“語り”のスタイルとしてエピソードを再構成。高度経済成長期における伊丹の人々の暮らしと家族の姿が描き出される。

[日程] 9月8日～10日

[会場] アイホール(伊丹市立演劇ホール)

中国・四国

●広島市

けんみん文化祭ひろしま実行委員会

〒730-8511 広島市中区基町10-52(広島県環境県民局文化芸術課内)

Tel. 082-513-2722 温井信聡

<http://www.hiroshima-kenbunsai.jp/>

けんみん文化祭ひろしま'17

1990年に県民の祭として始まり28回目となる今年度は、「ひろしまから発信・創造する21世紀の文化」をテーマに民謡・民舞や和太鼓など8つの舞台系と文芸祭の9つの分野別フェスティバルを県内各地で開催。出演者と鑑賞者がひとつとなって舞台を

つくり上げる参加型を目指す。このほか、県内8地区において地区別フェスティバルを実施予定。
[日程] 9月17日、24日、11月3日、12日、19日、26日、12月10日
[会場] 坂町町民センターほか

●徳島県徳島市

徳島県立近代美術館

〒770-8070 徳島市八万町向

寺山 文化の森総合公園内

Tel. 088-668-1088 友井伸一

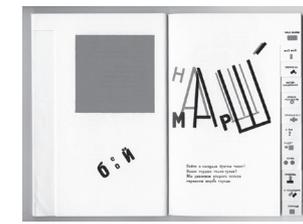
<http://www.art.tokushima-ec.ed.jp/bihon/>

「美術×本＝楽しさと多様性」展

美術と本をテーマに、3部に分けて所蔵作品を紹介。ピカソやシャガールら20世紀の挿絵本から現代のアートブック、地元出身の木版彫刻師・伊上凡骨の作品を展示。さらに、開館100周年となる県立図書館と連携し、仕掛け絵本や美術館制作の鑑賞教材絵本、県内の若者による自主制作冊子「ZINE(ジン)」の紹介など、「美術」と「本」の楽しい関係をさぐる。

[日程] 8月26日～10月9日

[会場] 徳島県立近代美術館



「声のために」エル・リシツキー装丁、ウラジミール・マヤコフスキー著 1923年刊(復刻版 2000年) 徳島県立近代美術館所蔵

九州・沖縄

●鹿児島県鹿児島市

鹿児島県文化振興財団

〒892-0816 鹿児島市山下町5-3

Tel. 099-223-4221 竹下陽子

<http://www.houzanhall.com>

かごしま明治維新博イベント 甲突川 水辺のフェスティバル 2017

鹿児島市の中心部を流れる甲突川に特設された水上ステージで、3夜連続で音楽・ダンス等が繰り広げられる入場無料の野外フェスティバル。鹿児島県文化振興財団の登録アーティストをはじめ、県内外で活躍するゲストアーティストや、一般公募により審査を通過した出演者が、水上ステージを盛り上げる。

[日程] 9月15日～17日

[会場] 甲突川下流MBC前 水上特設ステージ

トピックス

第11回アジア国際子ども映画祭 北見大会

2007年、指宿(鹿児島県)で初めて開催され、北見市(北海道)にて2015年より開催し、今年11年目を迎える国際映画祭。子どもたちが自ら制作した3分間の映像作品をコンテストする。できるだけ大人の手は借りず、脚本から撮影・制作に至るまでのすべてを子どもたちだけが担うことで、精神的な成長を促す人材育成も目指している。

「子どもの心の中に内視鏡を入れよう」というコンセプトで始まったこの映画祭は、現在全国9ブロックのほかアジア15カ国・地域、少年矯正施設で各ブロック大会を実施する。今年は「学校の先生」をテーマとして、小・中・高校生(およびそれらの年齢に相当する個人またはグループ)から作品を募り、ブロックごとに選ばれた上位3作品は、本選大会(国際授賞式へ招待)へノミネートされる。

[日程] ブロック大会(全国9カ所): 9月23日～10月14日 / 本選大会(北見市民会館): 11月25日
[問い合わせ] アジア国際子ども映画祭北見大会実行委員会事務局

Tel. 0157-33-1568

<http://asianfilm.chu.jp/>

特集 アートプロジェクト

夏フェス以降も全国各地で開催されている多彩なアートプロジェクトを紹介します。

※開催地の北から順に掲載。

☑は会場、📍は問い合わせ先です。
(➡は地域創造助成事業)

●北海道白老町 9月9日～17日

飛生芸術祭 2017

「僕らは同じ夢をみる」

2009年に開催し、今年で9年目を迎える芸術祭。旧飛生小学校の木造校舎と周辺の森を会場に、来場者を含め皆が「夢」を共有できるような空間を目指す。会期中は森で一昼夜を過ごす「TOBIU CAMP」をはじめ、旧校舎の教室を使用した奈良美智の個展、「飛生の森プロジェクト」で7年かけて取り組んできた森で展覧会を実施。

☑ 飛生アートコミュニティー

📍 飛生芸術祭実行委員会
contact@tobiu.com



飛生芸術祭2016 ASAKO YOSHIKAWA

●群馬県中之条町

9月9日～10月9日

中之条ビエンナーレ2017

自然豊かな里山や歴史ある温泉街に滞在して、地域とアーティストが共に歩むことで舞台をつくってきた芸術祭。6回目となる今年は163組の国内・海外アーティストが参加。4月より町内数カ所にてアーティスト・イン・レジデンスが行われ、教育プログラムにも積極的に取り組み、学生や地域住民との共同企画が多数実施される。

☑ 中之条町内各所

📍 中之条ビエンナーレ実行委員会事務局 Tel. 0279-75-3320

●埼玉県東松山市

9月1日～2018年1月31日

ひがしまつやま芸術祭2017

東松山市のさらなる芸術文化の創造発展を願う芸術祭。音楽や舞踊、演劇、芸能、美術、文芸、パフォーマンス、映像・放送、生活文化など多彩なジャンルで市民らによる企画が一同に集まり、まちを盛り上げる。芸術祭事務局が自主的に実施する音楽祭や美術展も。

☑ 東松山市内各所

📍 東松山文化まちづくり公社
Tel. 0493-24-6080

●横浜市

第1部: 創作 5月27日～9月30日

第2部: 発表 10月7日～9日

第3部: 展示 11月8日～2018年1月27日

ヨコハマ・パラトリエンナーレ2017

2014年、障害者とアーティストの協働による祭典がスタート。市民間の相互補完力を養い、誰もが暮らしやすい街づくりの実現を目指す。前身はアーティストと福祉施設の出会いによる次世代型ものづくり「横浜ランデヴープロジェクト」、手作り雑貨ブランド「SLOW LABEL (スローレーベル)」。今回テーマ「sense of oneness とけあうところ」のもと、アート、パフォーマンスなど多分野での表現を試みる。

☑ 象の鼻テラス・象の鼻パーク

📍 ヨコハマ・パラトリエンナーレ2017事務局 Tel. 045-661-0602

●横浜市 8月4日～11月5日

黄金町バザール2017—Double Façade 他者と出会うための複数の方法

横浜市中区黄金町エリアを舞台に開催されるアートフェスティバル。10回目の今回はゲストキュレーター制により、窪田研二が参加。「他者性」や「多様性」をテーマとした作品展示を中心に、今回は参加アーティストと地域住民によるプロジェクトも行うことで、アートとコミュニティの出会いの可能性を探る。

☑ 京急線日ノ出町駅～黄金町駅間高架下スタジオ ほか

📍黄金町エリアマネジメントセンター

Tel. 045-261-5467



まちの風景 photo by Yasuyuki Kasagi

●石川県珠洲市

9月3日～10月22日

奥能登国際芸術祭2017

能登半島の最先端に位置し、日本の生活文化の集積として、キリコなどの祭りの風習が今も残る珠洲市で初めて開催される芸術祭。国内外から参加する39組のアーティストと珠洲に眠るポテンシャルを掘り起こし、日本の「最涯」から「最先端」の文化の創造を試みる。

☑ 珠洲市全域

📍 奥能登国際芸術祭実行委員会
Tel. 0768-82-7720

●長野県茅野市

9月9日～10月22日

縄文アートプロジェクト2017

茅野市で初開催の「ハケ岳JOMON ライフフェスティバル」に関連して、茅野市民館開館10周年でのプロジェクトを引き継ぎ2回目となる。前回、詩を公募して生まれた「縄文のうた」を平原綾香と市民合唱団が共に歌うほか、藤森照信による壺穴式茶室制作・公開、縄文文化の創造性をテーマにしたアートや衣食住に関する多彩なイベントを行う。

☑ 茅野市民館ほか市内各所

📍 茅野市民館

Tel. 0266-82-8222

●三重県亀山市

9月24日～10月15日

亀山トリエンナーレ2017

三重県唯一の公募型現代アートの芸術祭。2008年から毎年開催されてきた現代美術のイベントを「亀山トリエンナーレ」として、2回目の開催となる。今年は100名を超える国内外のアーティストが参加予定で、

若手作家の作品発表の場でもあり、登竜門となっている。タブレットやスマートフォン向けの会場マップも公開。

☑ 亀山市東町商店街ほか

📍 亀山トリエンナーレ2017実行委員会 Tel. 090-8950-3011
亀山市文化スポーツ室
Tel. 0595-84-5079

●神戸市 9月16日～10月15日

神戸開港150年記念 「港都KOBE芸術祭」

開港150年を記念し、アートを通じて神戸港という「資源」の魅力を再認識する芸術祭。船に乗って作品を鑑賞できるなど、会場の特徴を生かした鑑賞方法や展示方法を展開。市民チームで結成された「神戸アートクルー」が広報活動をはじめ、独自の鑑賞ルートを紹介するマップの作成、まちあるきガイドなどのおもてなしを行う。

☑ 神戸港、神戸空港島

📍 港都KOBE芸術祭実行委員会
Tel. 078-322-6490



西村正徳(O₂ひまわり)/Thank-You Presents to Oxygen

●奈良県 9月1日～11月30日

国文祭・障文祭なら2017

奈良県で「第32回国民文化祭・なら2017」「第17回全国障害者芸術・文化祭なら大会」が全国で初めて一体開催される。9月～11月の3カ月間にわたり、県内全39市町村で障害のある人とない人が一体となってイベントを盛り上げ、2020年の東京オリンピック・パラリンピックへとバトンを繋いでゆくことを目指す。

☑ 奈良県全域各所

📍 国文祭・障文祭なら2017実行委員会事務局
Tel. 070-2287-3419

▼今月の情報(アーツセンター編)

新たにオープンした公立のアーツセンターを紹介します

アーツセンター情報

●データの見方

情報は所在地の北から順に掲載しています。●で表示してあるのはアーツセンターの所在地です。以下名称、住所、電話番号、公式サイトURLを記載しています。また、基礎データとして、設置者、運営者、ホール席数など施設概要を紹介しています。

●情報提供のお願い

地域創造では、地域の芸術環境づくりを積極的に推進するアーツセンター(ホール、美術館などの施設のほか、ソフトの運営主体も含みます)の情報を収集しています。特に、新規の計画やオープンなどのトピックスについては、この情報欄に掲載していく予定です。このページに掲載を希望する情報がございましたら、情報担当までご連絡ください。

●情報提供先

地域創造レター担当
Fax. 03-5573-4060
Tel. 03-5573-4066
letter@jafra.or.jp

●青森県八戸市

八戸ブックセンター

〒031-0033 八戸市大字六日町16-2

Tel. 0178-20-8368

<https://8book.jp/>

◎2016年12月4日オープン



「本のまち八戸」を推進する八戸市が運営する全国でも珍しい本の販売も行う公共施設。これまで手に触れる機会が少なかった本に出合える場の創出という、本に関する新たな公共サービスを提供する施設としてオープンした。

東京・下北沢にある本屋「B&B」を経営するブックコーディネーター・内沼晋太郎氏をディレクターに招き、本との偶然の出合いを誘発する提案型・編集型の選書・陳列を行うとともに、読書会を目的とした部屋や、出版・発表などを目的に執筆する人に無料で貸し出す「カンヅメブース」などの設備を設置。「本のまち読書会」「ブックセンター・ギャラリー」「アカデミック・トーク」「執筆・出版ワークショップ」など、本を“読む人”“書く人”を増やし、“本でまちを盛り上げる”ためにさまざまな企画事業が展開されている。

[施設概要]面積約315m²、陳列約8,000冊、セレクトブックストア(入門・基本図書棚、普遍的テーマ棚、フェア棚、ひと棚、本のまち棚)、読書会ルーム、カンヅメブース、ギャラリーほか

[設置者]八戸市

[管理・運営者]八戸市

[設計者]株式会社オリエンタル
コンサルタンツ

●群馬県太田市

太田市美術館・図書館

〒373-0026 太田市東本町16-30

Tel. 0276-55-3036

<http://www.artmuseumlibraryota.jp>

◎2017年4月1日オープン



太田駅前の賑わいづくり、また文化交流を通じたまちづくりの拠点として構想された融合施設。市民とワークショップをしながら専門家も交えて検討された建物は、街を歩くように美術館、図書館、カフェなどを行き来できるユニークな構造で、美術館と図書館の融合施設ならではの取り組みを展開する。

美術館は現代アートを核として、作家の滞在制作や野外作品設置などを通して、市民に広く開かれることを目指すほか、ものづくりをする地元企業とコラボした展覧会など、地域資源を生かした試みも行う。図書館には、世界60カ国以上・1万2,000冊を超える児童書、9,000冊のアートブックを所蔵。市内の公共施設や商店などで、お気に入りの本をまちで共有する「まちじゅう図書館」を行い、まちの周遊促進を図る。

[オープニング事業]開館記念展「未来への狼火」ほか

[施設概要]美術館：企画展示室1~3(169~49m²)ほか/図書館：絵本・児童書コーナー、アートブックコーナーほか/その他：視聴覚ホール、イベントスペース、カフェ&ショップ

[設置者]太田市

[管理・運営者](一財)太田市文化スポーツ振興財団

[設計者]平田晃久建築設計事務所

●香川県観音寺市

ハイスタッフホール (観音寺市民会館)

〒768-0060 観音寺市観音寺町甲1186-2

Tel. 0875-23-3939

<http://kanon-kaikan.jp/>

◎2017年4月1日オープン



さまざまな市民文化活動の拠点の役割を担ってきた市民会館が老朽化が進んだため、旧観音寺南小学校跡地への移転および大規模改修を経てオープン。運営を直営から指定管理者制度に移行し、「音を観るまち”文化芸術クリエーションホール”をめざして」を基本理念に掲げ、地域に根ざした個性豊かな文化の創造・振興を目指す。

鑑賞事業のほか、交流事業、育成普及事業、活動支援事業、情報発信事業なども実施していく。そのひとつとして開館を記念した市民ミュージカルを制作。出演者のみならず舞台スタッフ・運営スタッフ(広報・子役出演者サポート・衣裳制作補助など)も募集。浜畑賢吉(俳優、大阪芸術大学教授)、北川潤(俳優、音楽・声楽監督)らの指導で、来年3月の発表公演を目指す。

[オープニング事業]アンドレ・シブコー ピアノリサイタルほか

[施設概要]大ホール(1,200席)、小ホール(337席)、多目的ホール(舞台40m²、フロア580m²)、会議室(54席)ほか4室、スタジオA・B(16m²)

[設置者]観音寺市

[管理・運営者]あなぶき・四国舞台グループ

[設計者](株)日建設計

訪日客4,000万人時代を見据えた多言語対応

制作基礎知識シリーズ Vol.41

公立文化施設の多言語対応

講師 山名尚志
(株式会社文化科学研究所代表)

2017年3月、2020年の東京オリンピック・パラリンピック競技大会開催までに訪日外国人客を4,000万人までに拡大する「観光立国推進基本計画」が閣議決定された。これは、2016年実績の2,404万人の1.67倍、東日本大震災以前のピークであった2008年(861万人)と比較すると実に4.6倍以上の数値である。筆者は、2015年以来数度にわたり、(公財)東京都歴史文化財団や(独法)国立文化財機構からの委託調査の担当者として、外国人観光客激増に文化施設がいかに対応すべきか、その方向性について調査してきた^{(*)1}。本稿ではその経験を踏まえ、文化施設の外国人観光客への取り組みのあり方について基本となるポイントを述べていきたい。

文化施設の外国人対応には大きく2つの方向がある。1つは前述の観光立国政策やそれに基づく地方創生ビジョンに基づく外国人「観光客」への対応である。この場合、その目的は、日本の文化を普及する好機ととらえるとともに、外国人観光客を取り込むことで集客をアップさせ、施設経営に役立てることとなる。もう1つは、外国人「在住者」への対応、一般には多文化共生施策と呼ばれる方向性である。この2つは究極の目的は同じにせよ、全く異なる施策であるため、今回は前者について整理を行う。

●まず訪日外国人観光客を集められる施設かどうかを考える

訪日外国人客の急増を自館の集客増の好機としていくためには、前提として、施設が「観光施設」としての要件を満たしていることが必要だ。それは、「いつ行ってもお目当てのものが見られる」ということ。遠方からの観光客、まして海外からの顧客にとっては、その時しか行われていない企画展やその時々公演事業の内容を、事前に調べ、チケットを押さえることは非常にハードルが高い。観光施設としては、美術館・博物館であれば、常設展や収蔵品展の魅力をアピールすることが基本となる(劇場であれば常打ち公演)。一般的に言えば、日本でしか見られない伝統文化、あるいはアニメ等の日本が世界の中心であるもののほうが外国人にとっては

魅力的ということになる。

典型的な例としては根津美術館がある。日本美術や東洋美術の収蔵品展を中心とし、多くの国宝・重要文化財を擁し、かつ四季折々の日本ならではの自然を楽しむことができる庭園のある同美術館は、フランスなどの欧米観光客を多数集める都内有数のスポットとなっている。劇場で言えば、歌舞伎座や、アジア圏を中心にわざわざチケットを予約して来日する海外集客が多い2.5次元ミュージカル専用シアター「アイア2.5シアタートーキョー」などが「外国人向け施設」と言える。

これは、企画展・巡回展中心、劇場であったら短期の公演中心の施設は、焦って外国人観光客対応を進めても、あまり大きな成果が期待できないということでもある。もちろん、森美術館のように、企画展中心で多くの外国人を受け入れている施設もある。ただし、森美術館については、立地する六本木ヒルズ自体が都市型観光施設として大きな集客力をもっていること、また、企画展自体についても、国内美術館には珍しい積極的な海外広報を実施していること等、独自のパワーをもっていることを踏まえておく必要がある。

●“使いやすい”施設になる

外国人観光客への対応ガイドラインとして現在基本となっているのは、2014年に、観光庁が出した「観光立国実現に向けた多言語対応の改善・強化のためのガイドライン」である^{(*)2}。同ガイドラインでは、看板や標識・サイン、解説パネルなどの掲示物を対象に、①どこまでの言語に対応するかのルール(基本は日英併記だが、外国人観光客が多い、もしくは、増やしたい場合は、中国語・韓国語その他を増やす)と、②英・中(簡体字)・韓3カ国語での具体的な翻訳例や翻訳の際の注意が掲載されており、多言語対応の初めの一步がわかる構成となっている。

上記のガイドラインの使用については、気をつけておかなければならないことが1つある。それは、「主立った看板や標識だけを多数の言語に対応しても、実は、外国人観光客にとって殆

*1 東京都歴史文化財団からの委託調査事業については、調査報告書および、そのエッセンスをまとめたハンドブック「文化施設のための多言語対応ガイド」が公開されている。本稿で述べた内容が、国内外の事例および首都圏の公立文化施設のアンケートデータ等とともに詳細に記述され、また、施設の特性ごとの多言語対応の方向性についても図表で整理されているので、参考にされたい。
http://www.rekibun.or.jp/about/multilingual_efforts.html

*2 国のガイドラインについては、下記のURLから参照できる。また多くの都道府県で、国のガイドラインを基とした独自のガイドラインをつくっているため、自県でガイドラインが出されていないか確認しておきたい。
http://www.mlit.go.jp/kankochou/news03_000102.html

ど使いやすくなる]ということだ。実際問題、EXITやWCなどの簡単な英語標識を理解できない外国人観光客はまずいない。実用上は、英語と、あとせいぜいピクトグラムがあれば十分だ。

多数の言語での対応が求められるのは、主要な標識ではなく、むしろ細かな注意書きや臨時の張り紙のほうである。こうした細かなこと、臨時の変更に限って、内容がややこしく、しかも国によって習慣が違うため、英語だけでなくできるだけ多数の言語に丁寧に翻訳しておかなければすぐにトラブルが発生してしまう。「土足厳禁」という四文字熟語だけでは、欧米の顧客にとっては呪文も同様だし、コインロッカーがデポジットになっている国は日本以外では滅多にない。また、傘立てのカギの仕組みも、かなり独特。せっかくベビーカーの貸し出しや多機能トイレ等のユニバーサル対応をしても、その説明や利用カウンターの案内が日本語だけでは、外国人にとっては、存在しないのと同じことになってしまう。

海外の大規模施設、ルーブル美術館やメトロポリタン美術館などの事例を見ると、上記の考えに基づく割り切りが明確だ。標識類については、ルーブルでは、仏英西の3カ国語、メトロポリタンでは英語のみ、つまり多言語対応がされていない。一方、注意書きや張り紙類、例えばルーブルにおけるテロ対応のための臨時措置やメトロポリタンの料金についての注意書きは、5カ国語以上、場合によっては10カ国語程度でしつこく表記されている。トラブルが起こりそうな面倒なところ、一時的な張り紙こそ多数の言語で対応というのが基本なのである。

もちろん、すべてを10カ国語で掲示しては、いくらスペースがあっても足りなくなる。それを防ぐために必要なのが館内パンフレットやウェブサイトにおける来館案内の充実である。例えば大英博物館では、館内表示は(寄付金の除き)ほぼ英語だけだが、ウェブサイトの来館案内は8カ国語で対応している。また、ルーブルでは、実に13カ国語でパンフレットが用意されており、ウェブ上からもPDFでダウン

ロードが可能となっている。

●コンテンツを魅力的に見せるためには

いかに利用が円滑になっても、そもそも行きたいと思わなかったり、来た時に展示や公演に満足してもらえなかったら、集客には繋がらない。そのためには、ウェブサイトのコンテンツや誘客用のPR素材の充実、目玉となる作品や資料の紹介の強化が必要だ。展示解説等については、壁面に掲示できる言語数には限りがあるため、音声ガイドやスマートフォンアプリなどを使ったマルチメディア対応が重要となる。舞台の解説についても、イヤホンガイドだけでなく、近年ではポータブル型の字幕表示デバイスが使えるようになってきている(国立能楽堂などが導入)。

気をつけておかなければならないのが翻訳の質である。ネイティブチェックの実施は当然だが、問題は、直訳しただけでは、文化も背景知識の量も異なる外国人にはピンと来ないことが多い。これを解決するためには、“訳す”というより、外国人向けに魅力的な解説文を新たに“書き起こす”という姿勢が必要である。

川崎市立日本民家園では、この課題を、「そもそもの解説文を、子どもでも誰でもわかるよう、徹底的に開いてつくる」ということで解決している。背景知識なしでもわかるように初めからつくっておけば、直訳しても、外国人にもわかりやすく伝わる。これは、逆に言えば、これまでの日本の文化施設の解説の多くが、実のところ、日本人にもなかなかわかりにくいものがあった、ということでもある。

大英博物館やルーブル美術館、メトロポリタン美術館、MoMAなど、海外の大型美術館・博物館では、収蔵品のハイライトを、わかりやすく、多くの写真で美しく紹介したスーベニア(お土産)ブックを多数の言語で有料で販売している。学術的に正確な図録だけではなく、観光客が喜ぶ「わかりやすく美しい」コンテンツを作成し、提供・販売する。これも、多くの訪日外国人を惹きつけ、満足させる必須の対応のひとつである。

▼—今月のレポート

財団の支援事業や地域の創造活動に参考になる催しを取り上げてレポートします

青森県三沢市

三沢市寺山修司記念館
20周年記念特別公演

幻想市街劇

『田園に死す』
三沢篇



上：テラヤマロード。アーリーアメリカンの町並み／下：『田園に死す』エピソード(中央公園)

●三沢市寺山修司記念館

1997年7月開館。寺山の小・中学校の同窓生が中心となった寺山修司五月会の尽力により、母はつから寄贈された遺品の保存・公開のため市民の森公園内に三沢市が建設(栗津潔デザイン)。寺山の声が流れる展示室には、『演劇実験室・天井桟敷』の舞台美術を彷彿とさせる設えが施され、寺山の世界の象徴でもある“机の引き出し”を展示空間として用いる工夫など、創意溢れるものとなっている。2009年4月に直営から寺山修司の著作権を管理する(株)テラヤマ・ワールドによる指定管理に移行。

●『幻想市街劇『田園に死す』三沢編』

【日程】2017年8月6日

【会場】三沢市内各所で演劇、音楽、ダンス、即興パフォーマンスなど約70イベントを展開
【総指揮・構成・演出・音楽】J・A・シーザー(演劇実験室◎万有引力主宰)

【演出】佐々木英明、増田セバスチャン、福士正一、森崎偏隆、長谷川孝治

【主催】テラヤマ・ワールド 【共催】三沢市

*『田園に死す』

『空には本』『血と麦』に次ぐ1965年に発表された第三歌集のタイトル。1974年には寺山脚本・監督で同名の自伝的映画が公開されている。恐山の麓の村で母と二人暮らしをしていた少年時代の自分を主人公にした自伝的映画を撮影していた監督が、過去の自分に会いに行き、厚化粧された記憶の真の姿を確かめるという作品。

演劇実験室・天井桟敷を主宰し、短歌・俳句・詩、映画、エッセイなど多彩な活動で知られた“言葉の錬金術師”寺山修司。その寺山が9歳から12歳までを過ごしたゆかりの地、青森県三沢市に寺山修司記念館ができて20周年を迎えた。8月6日、その記念事業「幻想市街劇『田園に死す』三沢編」が行われた。

主な会場は、記念館周辺、三沢駅周辺、中心商店街の店舗に寺山の言葉のオブジェなど30点を設置したテラヤマロード界限だ。70年代に物議を醸した寺山の前衛的な市街劇『ノック』のように、テラヤマロード入口で地図を受け取り、街を歩くと、同時多発的に展開するイベントに遭遇する。米軍基地のある三沢らしい「アメリカ村構想」が作り出したアーリーアメリカン調の商店街と古い商店街が共存する不思議な雰囲気も、この日の三沢空港が工事中で滑走路を歩かされたことも、すべてが寺山の仕掛けた怪しい企みのように思えた。

「なみだは にんげんのつくることのできる 一ぱん小さな 海です」、「書を捨てよ、町へ出よう」…

12時、寺山の言葉が彩るテラヤマロードでオープニングアクトが始まった。「空に私自身を記述するところみは 飛ぶことでしかないのでしょうか?」という信号を送り続ける手旗少女、『田園に死す』の主人公の白塗りの中学生、寺山のモチーフであるサーカス団の人々などが街中に散って行く。夕方5時、中央公園に組まれた巨大櫓では総勢約180名(市内外の参加者約100名)によるクロージングの群衆劇が始まった。街中を徘徊する人々の頭には地図と一緒に配られた寺山のお面。まさに街が寺山ワールドになった1日だった。

プロデューサーは、記念館館長の笹目浩之だ(指定管理者の株式会社テラヤマ・ワールド代表。1万種以上の演劇ポスター収集・公開で知られるポスターハリスカンパニー代表)。

「直営の頃は県内学生俳句コンクールなどの文学館的な運営をしていました。全国的な発信事業はあまりなかった。アクセスも悪く、市民も記念館との接点が少なかった。これでは寺山さんに申し訳ないと思いました。そんな時に私たちが指定管理者として運営を任せられました」

1963年生まれの笹目は十代の終わりに寺山

の舞台を目撃し、人生を演劇に捧げると誓った。その死後、元妻で天井桟敷プロデューサーだった九條今日子に誘われてポスター貼りを生業にするようになり、今では寺山作品に関わるさまざまなプロデュースを手掛ける。“寺山のブランド化”を宣言し、縛られない寺山の精神を受け継ぎ、著書「家出のすすめ」を振ったサキイカ「家出のすすめ」や、渾名をネーミングにしたシュークリーム「テラシュー」などを仕掛けてきた。

指定管理者になってからは発信事業や地域との連携に力を注ぎ、さまざまな切り口の「企画展」(年2回～3回)、5月4日の修司忌にはオリジナル遊戯もあってファミリー層が楽しめる「寺山修司記念館フェスティバル」、地元バンドが出演する「テラヤマ・ミュージック・ミュージアム」、寺山ゆかりのアーティストや有識者による「市民大学」を次々開催。13年から4年間は星野リゾート青森屋の敷地などで、入場無料の寺山演劇祭も行った。一連の活動の成果を見た市と商工会は、2016年に寺山を街の顔とするテラヤマロードを整備し、市の職員も多数スタッフとして協力した今回の市街劇へと繋がった。

一方、まだ、基地のまちとしての生き残りを期待する人たちもいる。テラヤマロードにある銀座通り商店会会長の平野継昭は、「商工会の働きかけでテラヤマロードに協力したが、今でも財政難で整備が頓挫したアメリカ村に期待している。アングラ劇も寺山さんも好きだが、それで商店街が何とかなるような状況ではないと思っています」と言う。

廃業する店舗も多く、米軍兵士も最盛期の5分の3。三沢が三沢として生き残っていくためには、新たな街の顔で活性化を試みるしかないところまで追い込まれている。「かつて寺山の市街劇は警察沙汰になったのに、いまは市民参加という新たな枠組によって警察も市民も取り込めちゃう。時代だなあと感じます」(笹目)

「私の墓は、私のことばであれば、充分。」と言った寺山の存在意義は、まさしく怠惰な日常から生の本質を貫く“言葉の力”にこそある。その言葉を生きたものとして伝えた記念館が仕掛けた市街劇で、人々は何を思ったのだろうか。

(ノンフィクション作家・神山典士)